

若枝としてのメシヤ

ゼカリヤ書6章

万軍の主は、こう仰せられる、見よ、その名を枝という人がある。彼は自分の場所ので成長して、主の宮を建てる。(12)

この章の前半には、主が示された最後の幻が記されます。それは四台の戦車が全地へ出て行くもので、神の民を救うために主が諸国に審きを下されることを告げる幻でした。後半には、大祭司ヨシユアの戴冠式の様子が記されています。ゼカリヤはバビロンから帰還した三人の者たちから金銀を受け取ると、それをもつて一つの冠を作り、ヨシユアの頭にかぶらせました。祭司であるヨシユアが王として戴冠されることはイスラエルではありえないことでした。祭司職と王職は常に分離されていたからです。このヨシユアの戴冠は、やがて来られるメシヤが祭司であり王でもあられることを予表するものでした。さらにそのメシヤについて、「見よ、その名を枝という人がある。彼は自分の場所ので成長して、主の宮を建てる」と告げられます。「若枝」とはメシヤを表していました。キリストはまさに、ダビデの切り株から生え出た若枝であり、罪人たちをとりなす憐れみ深い大祭司として、また神の民を治める王として登場されます。この方は壊れていた主の宮を再建してくださいさるのです。

クリスマスを前にしたこのとき、ナザレのイエスを、わたしたちの罪をとりなしてくださいさる大祭司として、またわたしたちの全ての生活をご支配くださる王としてお迎えしようではありませんか。それこそクリスマスにふさわしい備え方なのです。